西洋経済史 A（坂出）

第１２講　講義のまとめ

2004 年 7 月 9 日

1　西洋経済史学の課題と対象

昨年の講義一「パクスブリタニカからパクスアメリカーナへ」現代欧米経済史本年一それぞれどのような内部構造をもっていたのか、基軸産業の展開を中心に解説(AB)

「最初の工業国家」イギリスにおいて、前近代社会とは区別される資本主義的生産様式が、なぜ(Why)、いつ(When)、だれが(Who)、どこで(Where)、どのようにして(How)、生み出されたのか?そしてそれは何か(What)?19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて成立したパクスブリタニカの成立史→「最初の資本主義的帝国主義国」

Popl1lation「人口」Thomas Robert Malthus, 1766-1834『初版人口の原理』(1798 年) An essay on the Principal of Popu1ation 1789 年フランス革命・救貧法の廃止一救貧法により貧民に貨幣を与えると生産量一定の食料品の価格が上昇し、より多くの労働者の生活状態が悪化する。・自由貿易に反対一安い外国穀物が輸入されることにより、劣等な土地の耕作が放棄され、地主の手に入る地代が減少する。(←→スミス・リカード)→地主階級を勢力基盤とするトーリー政権の支持政策的焦点は、救貧法と穀物法

数量的把握にとどまらず、経済生活を営む「生きて活動する」住民の総体の再生産を念頭に置いた経済分析・歴史分析をこころがけたい population 具体的な表象、そのままでは混沌に過ぎない、を分析・理解するツールとして経済史の用語(範嬢、カテゴリー)を歴史的展開に沿って、順次説明していきたい。

農業→繊維工業→重工業→サーヴィス業市民革命産業革命農業革命/金融革命/(財政革命)イギリス中世社会における地主(土地所有者)と農民の関係からどのように資本主義的生産関係が生まれてくるか?

第 2 部　イギリス産業資本主義確立過程

農業:開放耕地制度→第一次囲い込みへ工業:農村工業　→都市ギルドエ業　→マニュファクチュア毛織物・綿工業/石炭・製鉄業/鉄遵業・造船業の地域・産業連関的発展プロセスの検討

2　農業革命

【1】開放耕地制度[1]三圃農法と開放耕地制度・領主・農奴関係・封建地代の三形態:①労働地代②生産物地代③貨幣地代 14・15 世紀のイングランド①②→③へ[2]封建的危機と農民一僕

●封建的危機①中世期における貨幣悪鋳に求める「貨幣危機」説②危機の原因を、黒死病とそれに起因する人口の減少に求める説③14 世紀を「沈滞」期と規定する説ポスタン:②③賦役地代の金納化(コンミュテーション):領主のための労働と自已の保有地のための労働が場所的にも時間的にも区別→隷農の全時間を、自分自身の保有地の耕作にあてることができるようになった。:ただし、領主は地代金額を一方的に引き上げることも可能だった。

→領主に有利な貨幣地代を、農民に有利な貨幣地代に転化するためには、長期にわたる農民の不断の闘争が必要であった。1358 年ジャックリーの乱(フランス)1381 年ワット・タイラーの乱(イギリス)→「地代の金納化」1524 年農民戦争(ドイツ)危機打開の方向性ドイツー「再版農奴制」(農場領主制)フランスー寄生地主制イギリスー封建領主の近代的地主への転化

【2】第一次囲い込み(15 世紀後半～17 世紀前半)[11 農民的囲い込み[21 領主的囲い込み:牧羊需要の増加

３　毛織物工業とマニュファクチュア

テーマ「資本主義の起点は都市か農村か?」

1　大塚久雄のマニュファクチュア論(1)マニュファクチュアと問屋制の絡み合いの二つの型　第一形態:「農村の織元」(中産的生産者層またはヨーマン層の産業経営)を中心とした問屋制度・問屋としての商業資本が、農村マニュファクチュアの利害に服している。第二形態:「都市の織元」(問屋制商業資本)を中心とした商業資本による産業資本の支配(2)第一形態×第二形態:マニュファクチュアの歴史的意義

2　堀江英一のマニュファクチュア論(1)堀江の大塚批判(2)織元(c1othier)の 3 分類(『入門』92 頁)①「貧乏な織元」独立自営の小営業者②「中産の織元」:「マニュファクチュア」③「富裕な織元」羊毛を生産地から買い入れて①②に糸市を通じまた掛けで売る羊毛商人、毛織市場を通じまた直接にそれをロンドンに売る毛織物商:マニュファクチュア段階の毛織業の頂点(3)羊毛生産者→織元①②③→毛織物市場の関係はどうなっているか?

3　サフォークにおける農村織物都市の成立と展開

(2)イギリス農村工業の発展(3)サフォーク(東部)農村織物都市の成立(4)織元の性格

牧羊業者→「富裕な織元」→ロンドン市場「中産の織元」この関係はどうなっているのか?→「ジェントリ」(郷紳:爵位(男爵以上)をもたない地主)階層の分析

4　ジェントルマン資本主義論

1　トー二一×トレヴァ・ローパー論争(1)「ジェントルマン」とは誰か?(2)「ジェントルマンの勃興」16 世紀(市民革命に先立つ 1 世紀):ジェントリの勃興期・社会構成体の上層部が崩壊しつつ同時に再構成されていく構造的な変化の進行貴族(名門旧家):領主経営悪化と著修により財政悪化国王:王領地の減少ヨーマン:16 世紀末に長期借地契約の終了とともに没落⇒農民・貴族・教会(宗教改革後の修道院領再配分)・国王の手からすべりおりてくる所領をジェントリが手中に貴族の没落とジェントリの勃興←(反映)←土地経営方式の差→絶対王政を頂点とする封建的土地所有体系・法が r 農業の資本主義化」の限界に転化する→イギリス革命(3)トレヴァ・ローパーのトー二一批判トレヴァ・ローパー:土地経営方式(トー二一)ではなく、商業・金融・とくに官職保有こそが、没落か勃興かを決定→「責族×ジェントリ」(トー二一)よりも「農村ジェントリ×宮廷ジェントリ」の対立が重要イギリス革命トー二一:没落貴族×勃興ジェントリ・商業ブルジョアの対抗

2　イギリス革命における土地問題(1)イギリス革命は「上から」か「下から」か?●「下から」の道経済過程:封建的土地所有の解体→自由な独立自営農民層の形成イギリス革命:経済過程に照応して、独立自営農民眉を基軸として進行(2)イギリス革命における二つの綱領国王一領主一農民の重層的土地所有諸関係:開放耕地制度・ジェントリを中心とした領主的大土地所有の方向性・農民の隷農的零細土地保有の方向性①汎議会派(長老派・独立派)の綱領:地主的綱領②水平派綱領:農民的綱領③水平派の蜂起の敗北→独立派勝利

5　マーチャント・バンカーの台頭

【1】イギリス革命と商人・金融利害　1 イギリス革命における長老派　2 土地利害と金融利害の融合 3 アムステルダムからロンドンへの金融中心地の移動

6　綿工業と機械制大工業

1　綿工業における産業革命(1)「世界の工場」(2)インド貿易と綿布に対する需要増大(3)家内工業

制度 The　domestic　system
2　綿工業における発明の連鎖
①ケイ②ワイアットとポール③ハーグリーブスのジェニー紡績機(1765 年)④アークライト⑤クロンプトンのミュール紡績機→家内工場の残津をジェニー機とともに一掃
3　機械制大工業成立の諸結果　(1)問屋制の終焉　(2)労働者問題　(3)ラダイト運動(機械打ち壊し)　(4)過剰生産恐慌

7　産業革命

【1】「産業革命」論の系譜
・産業革命の開始期[1]古典的解釈(断続説)[2]修正論的解釈(連続説)●産業革命が労働者階級の生活水準の低下をまねいたかどうか?論争[3]NewEconomicHistory(漸進説)・・→「地域的アプローチ(regional approach)」
①地域的なデータは信頼性が高いものが多い②鉄道時代(1825 年以降)以前は製品・生産要素市場のための国内市場は全国的には統合されていなかった。③地域的な差異
【2】産業革命「以前」と「以後」～大塚『欧州経済史』を中心に
[1]産業革命の推進した近代的産業資本家がどのような階層から出現したか?･日本の資本主義発達史をめぐる論争から出発日本の近代的工業を推進した三井・住友は維新以前に商業資本として地位を築いていた。①商業資本の産業資本への転化説(社会的系譜における連続説)②別な資本家の出現(社会的系譜における断絶説)[2]近代に独自な生産様式としての r 資本主義」
【3】分析視角一「産業」と「地域」[11 なぜイギリスが「最初の工業国家」になったのか?[21 なぜランカシャーが「最初の工業地域」になったのか?【イギリス革命】

8　農業革命

【3】第二次囲い込みと農業革命[11r 農業革命」1750-1850①開放耕地の囲い込み②新農業技術・機械の適用ノーフォーク農法'The Norfolk Four Course' [2]第二次囲い込み(「議会囲い込み(Par1iamentary Enc1osure)」)[3]第二次囲い込みの社会経済的影響三分制度(近代的地主・農業資本家・農業労働者:三つの基本階級)の成立一近代的土地所有?三分制度の確立?近代的地主→地代?農業資本家→利潤?農業労働者⇒労賃

9　マーチャント・バンカーの台頭

【2】マーチャント・バンカーの概念と機能　1 マーチャント(merchant)業務 2 手形引受業務(acceptance business)●有カマーチャントの手形引受業務への特化 3 発行業務(issue business)
【3】有力なマーチャント・バンカーと国家財政 1 ペアリング商会 2 ロスチャイルド商会 3 マーチャント・バンカーと政府
3　ケイン・ホプキンスのジェントルマン資本主義論
(1)ケイン・ホプキンスのジェントルマン資本主義論 1970 年代以降:「ジェントルマン資本主義」論一イギリス経済史・帝国史の中心テーマ製造業者の利害:経済および外交政策の形成に対して、今まで考えられていたほどは大きな影響力をもたなかった。1688 年名誉革命「地主利害を田園の重壕内に隠し、政治体制に対する彼らの要塞をより堅固にした」→ジェントルマン秩序の形成(シティの指導的な金融業者や商人はジェントルマンの身分を与えられていた):権力が低下しつつある地主階級の要求と、拡大しつつあるサーヴィス部門の妥協;地主階級の財産と、革命を財政的に支えたマーチャント・バンカーの財産の結合 1688 年(名誉革命)～1850 年:「ジェントルマン資本

主義」の確立「改革的地主とそのジュニア・パートナーであある改革的金融業者によって率いられた資本主義の一形態」19 世紀中葉～:イギリスの経済成長のエンジン:サーヴィス部門(第一次産業・第二次産業に属さないすべての活動の総計)→シティを中核とするイングランド南東部国内)自由貿易・金本位制・均衡財政→最終的な受益者:ロンドンのシティとサーヴィス部門の関係者たち(世界の工場としてのイギリスの立場よりも国際的サーヴィス・センターとしての地位を優先※自由貿易(1846 年穀物法廃止):ロンドンを食料と原料の世界取引の巨大申心地にかえ、海運、海上保険、商晶取引所が急成長しシティに大きな利益をもたらした)国際)大英帝国の拡張:ジェントルマン秩序の輸出

(2)利害分析図)ジェントルマン秩序における諸経済グループ収入形態サブグループ社会階層地域土地利害地代非改革地主改革地主ジェントルマン的結合資本利害　利潤：利子　金融資本家　ジェントルマン的結合　南東部産業利潤　製造業資本家　×　北部(地方)農業資本家　労働利害労賃　農業労働者　製造業労働者・製造業資本家(コブテン主義 Cobedenite)：労働者階級からの圧力に対処するためジェントルマン資本主義との妥協

16 世紀の「ジエントリの勃興」⇒ピューリタン革命(1649:「ブルジョア的土地変革」)と名誉革命(1688:「ジェントルマン秩序」確立)を通じて形成された「ジェントルマン資本主義」(地主と金融資本家の同盟)→大英帝国の膨張

●第 3 部イギリス資本主義の特質

10　穀物法と自由貿易体制

【1】重商主義から自由貿易体制へ (1)18 世紀までのイギリス通商政策①重商主義体制(the mercantilist system)②帝国の役割③三角貿易(The Triangular Trade)　(2)自由貿易への転換 1776 年アダム・スミス『国富論』出版:重商主義批判と自由貿易提唱ウィリアム・ピット(小ピット、William Pitt)1783-1801, 1804-06 首相→関税削減など自由貿易推進 1786 年フランスと互恵協定(a reciprocal traty)交渉

【2】穀物法(the Corn Laws)廃止 (1)穀物法(the Corn Laws)廃止マルサス：穀物法撤廃→穀価下落→農業衰退→工業への需要減少⇒価格低下⇒利潤低下・地主階級の利益が有効需要維持を通じて社会発展をもたらす。リカードウ:穀物法撤廃→穀価下落→労賃低下→高利潤→資本蓄積増大→雇用増大→経済繁栄・高利潤・資本蓄積の増大による社会発展①国際分業論②穀物自給体制③三大階級への影響

(2)穀物法廃止

【3】自由貿易体制の試練①全国公正貿易同盟(1880 年代)②関税改革キャンペーンチェンバレン(Joseph Chamberlain)1895-1903 植民地相・関税の再導入と帝国の結合(cf. ポーア戦争 1899-1902 年)・産業保護と報復関税(外国に対して共通の関税をもってする自由貿易帝国)×反発シティの位置「製造業の運命は第二次的な考慮条件であり、シティが世界の割引業者として生き残るのであれば、他の国がその工場になってもよい」(『ジェントルマン資本主義の帝国 I』148 員)↓失敗→保守党分裂(以後 20 年間自由党が政権握る)

11　製鉄業と「産業衰退」

【1】イギリス産業はなぜ衰退したか?

1　イギリス綿工業の衰退要因イギリスのみがリング導入遅れる。：新技術採用の遅れ→なぜか?2 イギリス「産業衰退(industrial decline〕」論

【2】イギリス製鉄業の成立過程 1 分析視角:産業立地と市場関係 2 全国的鉄市場の形成過程①製

鉄業の端緒②16 世紀:バーミンガム局地的市場圏③17 世紀前半:鉄製品および鉄販路の地域的規模への拡延【イギリス革命】④18 世紀前半:西部ミッドランドを中心とする全国市場の成立　3　18 世紀前半の製鉄業の限界

【3】製鉄業における産業革命　1「ダービー帝国」の興隆　2 ヘンリー・コートによる大量生産 3　製鉄王クローシェイの勃興と「衰退」●「製鋼革命」(製鉄業から鉄鋼業へ):19 世紀後半ベッセマー法発明→鋼鉄生産→巨大な新規設備投資の必要(旧来の生産方法のままでは収益悪化)●クローシェイの投資選択・製鉄所近代化投資←⇒証券資産保有(当時 5 クローシェイ家:製鉄業からランティエ(rentier)化(金利・地代生活者化)

4　イギリス製鉄業の衰退「イギリス鉄鋼業の相対的衰退はなぜ起こったのか?」バーン(Bum1940)説:「企業者活動の衰退」「企業家責任」説テミン(Temin1966)説:「環境」説マクロスキー(McC1oskey1973)説:計量経済史的手法から「衰退」を否定企業者活動の衰退産業経営者のジェントリ化→では、イギリス製造業の衰退を招いた「事業環境」はどのような構造を有していたのか?

12　救貧法と労働者階級

1　ラダイト運動(1)自治都市におけるギルド(2)産業革命のインパクト・熟練労働者の基盤揺るがす。(3)ラダイト運動(Luddism)

2　救貧法(1)旧救貧法体系 1601 年旧救貧法(01dPoorLaw):教区単位の行政:各教区は区内の貧民の救済に責任(2)産業革命のインパクト旧救貧法体系:①労働力の移動を制限して資本の自由を束縛②地主階級の救貧税負担を増加(→地主階級の反対)(3)新救貧法 1833 年新救貧法(New Poor Law:the Poor Law Amendment Act):・健常者(ab1e-bodied)への院外救助(outdoor relief)の廃止

3　工場法と労働者階級

(1)工場改革”the domestic system"から the factory system'へ(2)工場法(3)労働者階級の運動 1838 年チャーチスト(Chartist)全国大会「新モデル組合(new model union)」1868 年労働組合会議(TUC)結成

地主階級トーリー党 → 保守党 ディズレーリ × (穀物法・選挙法改正) 中産階級 ホイッグ党 → 自由党 グラッドストーン・登場してきた労働者階級は、中産階級の対地主階級の対立において利用されていく。

13　ボーア戦争と大英帝国

1　帝国主義をめぐる論争点(1)「帝国」への再注目(2)「自由貿易帝国主義」論(3)「ジェントルマン資本主義(Gentleman1yCapitalism)」論

2　ボーア戦争と大英帝国(1)ボーア戦争と開戦理由(2)経緯(3)南アフリカ金鉱業

3　大英帝国の構造(1)英帝国と多角的決済システム・第一次大戦でイギリスが維持・発展させようとした権益とは?「イギリス産業の競争的地位の後退はイギリス資本主義の世界的な主導権の喪失を意味したのか?」●従来の考え方 19 世紀末〜20 世紀初頭:米独の台頭→ミドルパワーへの転落 019 世系昧〜20 世紀初頭のイギリスを中心とする世界経済をどうみるか?・複数の中心工業諸国と周辺農業地域をネットワーク状に取り結ぶ世界的規模の多角的貿易決済システム・イギリスに資金が環流してくる最重要の回路一インド:インド一国でイギリスの対外支払勘定の 5 分の 2 以上をファイナンス。英はインドを国際収支上の「安全弁」としながら海外投資を拡大→むしろこの時期には世界経済におけるイギリスの主導性は強化されていた。Eg.ケインズ『インドの通貨と金融』(1913 年):金為替本位制(2)多角貿易機構の確立と国際通貨ポンド①中心国イギリスが自由貿易体制を維持し、世界に市場を開放②申心国イギリスが国際的信用制度を確立し国際商品取引所

となる。・イギリスは「世界の銀行」「世界の手形交換所」と呼ばれる。・イギリスを介在させない第三国間貿易においてもポンド建てのロンドン宛手形が利用される。→ポンドは第三国間の貿易媒介通貨となる。イギリス:「金利生活者国家」へ　cf 大塚久雄『欧州経済史』について資本主義形成史.「前近代社会=共同体内部への、商品経済関係の浸透⇒共同体の解体と局地的市場圏の成立。小経営的生産者の全般的形成→価値法則による小経営の両極分解と、産業資本の形成」→比較類型論的把握①下からの自生的な小生産者的発展の経路「アメリカ型」②上および外からの旧土地所有・前期的資本の転成の経路「プロシア型」×「地主的土地変革」イギリスにおける土地変革は、領主的土地所有を破砕し、自由な農民的土地所有の全般的成立を実現する農民的土地革命(cf.戸谷敏之『イギリス・ヨーマンの研究』(御茶の水書房、昭和 26 年)ではなく、領主的土地所有がブルジョア的土地所有がブルジョア的土地所有に移行したもの(尾崎芳治)